

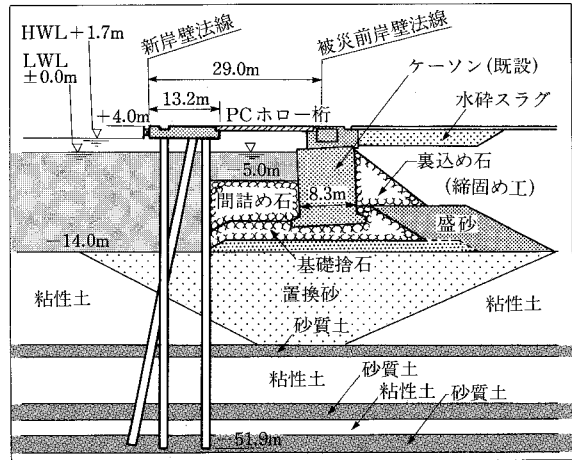
挑む」(学会誌 95 年 11 月号ブックレビュー参照)
 に対して第 11 回技術・科学図書文化賞優秀賞(日
 刊工業新聞社)を受賞するという喜びも重なった。

(本州四国連絡橋公団 設計一課 古家 和彦)

神戸港・仮設コンテナ棧橋 供用開始

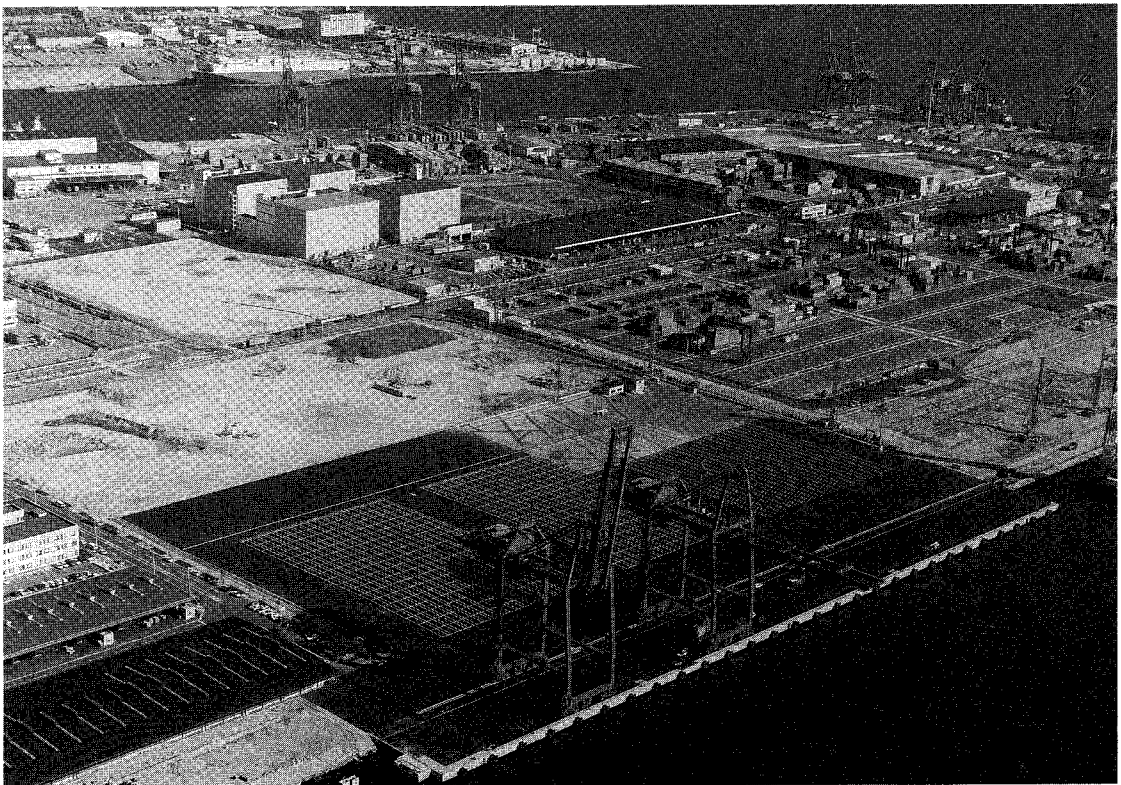
阪神・淡路大震災で壊滅的被害を受けた神戸港
 において仮設コンテナ棧橋の一部が完成し、平成
 7 年 11 月より供用開始の運びとなった。

神戸港の港湾施設の本格復旧は、コンテナ埠頭
 の復旧を最優先として進めるが、すべてを回復す
 るまでには 2 カ年を要することにより神戸港の空
 洞化が懸念されるため、首相の諮問機関である「阪
 神淡路復興委員会(下河辺淳委員長)」の緊急提
 言を受けて、仮設コンテナ棧橋が六甲アイランド
 の一角に建設されたものである。この仮設コンテ



緊急コンテナ棧橋の標準断面

ナ棧橋は、外貨コンテナ船用 2 バース、フィーダー
 船用 2 バース総延長 1 000 m の岸壁で、このたび
 供用開始したのは、運輸省第三港湾建設局施工分
 の外貨コンテナ船用 1 バース、350 m である。11



完成した仮設棧橋埠頭

月13日にとり行われた供用開始式典には、平沼運輸大臣、下河辺委員長他多数の関係者が列席し、神戸港復興へ向けた第一歩を祝うとともに、完全復興へ向けた一層の努力の誓いを新たにしました。

仮設コンテナ栈橋は工事開始後半年の工期で供用開始する必要性から、その設計と施工の至るところに工夫が盛り込まれた。そのひとつが被災した岸壁の一部を活用するような栈橋構造を採用したことである。すなわち、被災したケーソン岸壁の前面に鋼管杭を打設して栈橋を築造するとともに、既設ケーソンを栈橋の土留め壁として利用する構造とした。既設ケーソンの安定性は、前面への間詰石の設置およびケーソン背後地盤を軽量化することによって確保した。また、鋼管杭の打設では鋼管の継手を省いた連続鋼管杭構造を採用し、打設効率を高めている。連続鋼管杭の背後の間詰石は、鋼管杭の打設間隔に応じた大きさを選定して投入した。

2つ目の工夫は、海上におけるコンクリート工の型枠と養生期間を短縮するため、プレキャスト部材を多用したことである。栈橋および既設ケーソンの上部工は従来現場打設しているが、今回は鋼管杭の打設と併行して工場製作されたプレキャスト部材(1基25mのブロックを14基)をフローティングクレーンにて設置し、工程を大幅に短縮している。両上部工の間を連結する梁も工場製作されたPCホロー桁を用いている。このような工期短縮への工夫により、5月中旬に開始された工事は約6カ月の工期で竣工を迎えることができた。

(運輸省第三港湾建設局 震災復興建設部 及川 研)

「人にやさしい橋に関するシンポジウム」開催

土木学会四国支部の主催で、約180名の参加者を集めて「人にやさしい橋に関するシンポジウム」が、平成7年10月14日(土)、徳島県建設センターにおいて開催されました。

本シンポジウムの主たる目的は、一般市民にも関心のあるテーマの講演や討論会を通して、一般



河野 清教授の開会挨拶

の方々に土木のことや土木学会の活動に理解を得ることでした。徳島地区の支部幹事が中心となって企画運営を行い、本誌9月号会告、徳島県と徳島市の広報や新聞報道等による開催案内により、多数の市民ならびに会員が本シンポジウムにご参加くださり、当初の目的が満足されたものと幹事一同安心いたしました。

プログラムとして、まず土木学会副会長の河野清徳島大学教授が開会挨拶が行われ、土木学会の歴史、活動概要等の紹介が行われました。次いで神田睦会員(和設計専務取締役)、松村博会員(大阪府計画局副理事)、石本昇会員(徳島県道路建設課橋梁係長)が、それぞれ「渡りやすい橋ってどんな橋」「親しみをもてる橋ってどんな橋」「人にやさしい徳島の橋」と題した講演が行われました。神田会員は、約40名の大学生を被験者とした「徒歩」と「自転車」による徳島市内16橋のアンケート調査結果から、渡りやすい橋の理想像を提案され、今後の橋梁の設計方向を示唆されました。松村会員は、橋に親しみを感じる要素(名橋となるための条件)について数多くの橋のスライドを用いてわかりやすく説明され、名橋を架設するためのヒントを示されました。石本会員は「徳島県の橋梁の現状」「やさしいまちづくりと公共土木施設整備」および「人にやさしい橋づくりの事例」について、スライドや昭和初期の吉野川橋の施工記録写真等を交えて、これからの徳島県の公共土木施設整備の方向を説明されました。